



## インド中世前期の社会におけるシヴァ信仰と女神信仰

研究者所属・職名 : 文学研究科・教授

ふりがな よこち ゆうこ

氏名 : 横地 優子

主な採択課題 :

- [基盤研究\(C\)「インド中世初期における女神の最高神化の機制」\(2007-2009\)](#)
- [基盤研究\(C\)「インド中世前期におけるシヴァ教文学—一般信徒向け文献を中心として—」\(2011-2014\)](#)
- [基盤研究\(B\)「ヴィシュヌ教からシヴァ教へ—インド中世の始まりにおける宗教文化の転回—」\(2015-2019\)](#)

分野 : インド学、宗教学

キーワード : ヒンドゥー教、サンスクリット文献、文献学、神話、宗教史、南アジア

### 課題

南アジアの歴史学において本格的な中世史研究が開始され、「暗黒の中世」という画一的イメージが覆されるのは1970年代以降である。一方、中世前期（6～12世紀頃）の宗教文化については、主たる文献資料となるプラーナ文献、タントラ文献の批判的校訂研究の欠如のために研究の進展が阻まれてきたが、90年代以降特に初期シヴァ教タントラ文献の校訂出版が徐々に進み、また東南アジアの政治情勢が落ち着いたために、南アジアからの宗教文化の移植を示す東南アジア古代の碑文の研究も再び盛んになってきている。こうした近年の研究から明らかになったのは、中世前期の南アジアにおいて主流となった宗教文化は女神信仰を含むシヴァ教と仏教であり、特にシヴァ教の優位と女神信仰の台頭が顕著なことである。

このようにインド中世前期の宗教文献に関する研究が進展する中で、一般信徒を含むインドの社会全般に、そうした宗教文化がどのように伝えられかつ受容されてきたのかはあまり明らかにはなっていない。その原因は、この時代の一般社会向けの宗教文化を最も端的に示すプラーナ文献群の研究の遅れのためである。本研究者は、このプラーナ文献とそれに先立つマハーバータ等の叙事詩文献の文献学的に精密な研究に基づき、当時の宗教文化、特に女神信仰とシヴァ信仰が社会の中でどのように期待され受容されたか、その歴史的過程を明らかにすることを企図している。



## インド中世前期の社会におけるシヴァ信仰と女神信仰

### 研究成果

まずなによりも国際共同プロジェクトとして推進されてきたスカンダプラーナ校訂研究の進展が大きい。このプロジェクトは、これまで神話を主体とするために歴史的研究が不可能と考えられてきたプラーナ文献の、初めての厳密な批判校訂版の作成に基づく歴史的研究として高く評価されている。これまでに全体のほぼ半分の校訂研究・出版を終え（Vol.1, 2A, 2B, 3, 4）を終え、現在は第5巻を準備中で2021年春には出版の予定である。

このスカンダプラーナ(550—650年頃成立)は、シヴァ神話を体系的に描いた最古のプラーナ文献である。また「戦闘女神」の神話についても最古の詳しい語りを含んでおり、現在まで女神信仰の聖典とされている『デーヴィーマーハートミヤ』に先立ち、その最も重要な素材となったと思われる。本研究者は、まずこの作品中の女神神話を用いて、『デーヴィーマーハートミヤ』の成立に至る戦闘女神信仰の歴史的発展過程を、文献資料だけではなく、考古・美術資料、特に「水牛の魔神を殺す女神」像の図像分析を使って明らかにした。

続いて研究対象をシヴァ信仰に移した。特に古典期におけるバーガヴァタ（ヴィシュヌ・クリシュナ）信仰から中世前期のシヴァ信仰への転回期（6世紀頃）に焦点を当て、スカンダプラーナをその転回点になる作品と位置付け、この作品のシヴァ神話の中に古典期によく知られていたヴィシュヌ神話がどのように包摂されているかを研究した。その過程で判明したのは、スカンダプラーナがヴィシュヌ信仰を決して否定することなく、包摂しつつも神話の語り的一部を変更することで、シヴァ神を上位に置く体系の中にうまく取り込んでいることである。また当時の石窟寺院の調査からは、地方による時期の差はあるが、美術資料でもヴィシュヌ信仰からシヴァ信仰への移行がみられること、その中でハリハラと呼ばれるヴィシュヌとシヴァを合体させた図像が出現すること、また時にはヴィシュヌの図像とシヴァの図像が等価に置かれ両信仰の折衷が窺われることも判明している。

### 今後の展望

まず、スカンダプラーナ校訂研究を完了させ、プラーナ文献の文献学的研究のモデルを確立することがなにより急務である。現在のペースで国際共同研究が継続できるならば、あと15年ほどで完成できる見込みを立てている。中世前期に作成された他の多くのプラーナ文献については、同じような精密さで研究することはできないが、スカンダプラーナで行なった神話の語りの分析方法を適用することでおよその構造や作成意図を確定することはできるだろう。また、すでに絶対年代をほぼ確立できているスカンダプラーナとデーヴィーマーハートミヤとの影響関係を手がかりに、相対的な成立年代を確定していくことが可能と思われる。こうした基礎的作業を行う一方で、当時の宗教文化の社会的受容の様相を示す考古・美術資料や文学作品を並行して研究していくことで、発信と受容の両面からインド中世前期の社会における宗教文化の包括的理解に寄与できると考えている。